

ソ連抑留の記

岐阜県 中上 英雄

戦争も終わって、あれから五十有余年の歳月が流れ、記憶も薄れて分かってもらえるかどうか自信がないが、淡い記憶をたどってみたいと思う。

私は、満州の奉天で終戦を迎えた。当時の満州は、精強を誇った関東軍の主力は南方防衛戦の比島や本土防衛にと転進し、ソ満の国境線は手薄となっていた。中国戦線からの補充と満州在住の男性はことごとく召集されたが、満足に武器もない存在であった。これを見透かしていたかのごとく、ソ連軍は、八月九日未明、日本と締結していた不可侵条約を無視して満州領内になだれ込んで来た。

その頃、我々機甲部隊は奉天付近一帯に布陣していた。命運を懸けた陣地である。我々が敗れたら南は米軍、北はソ連軍の挟み打ち、日本の運命は実に我が隊

の双肩にかかっている。悲壮な決意で満を持していた。

八月十五日の重大放送は、日本は連合国に無条件降伏で戦争は終わったということであった。

戦陣訓は全將兵に「生キテ虜囚ノ辱メヲ受ケズ、死シテ罪禍ノ汚名ヲ残スコト勿レ」と教えていた。一時は騒然となった。程なくして武装解除され、丸腰になった我々は今後どうなるか、無条件の降伏ではソ連軍に従わざるをえなかった。

奉天の街の治安は一瞬にして暗黒の世と化した。日本人の住宅はことごとく荒らされ、婦女子は人前でも容赦なく辱められ、実に目を覆う有り様であった。助けを求められても囚われの身、如何ともなしたがたく、やるせなく、悔しかった。五十有余年過ぎた今でも、そのときの様子がありありと脳裏に焼き付いている。

武装解除とともに奉天市内のある学校に収容された。満州にはかなりの物資があった。ソ連軍は手当たり次第に何でも持ち去った。残念であったが、その作業を一カ月ほどさせられた。

十月中旬、「東京ダモイ」「東京ダモイ」（日本に帰れる）と言われて、貨車に詰め込まれて奉天駅を北上した。途中でソ連軍から給食（黒パン）が配られたが、まずくて食べたものではなかった。ソ連兵に見つからないように捨てた。我々は、携帯口糧で自炊した。

やがて満州最北端の街黒河に着いた。十月二十七、八日頃で定かではないが、貨車の中で一夜を明かしたと思う。黒竜江が目前に見える。対岸はソ連の街ブラゴエシチェンスクである。翌日、荷物を背負って黒竜江を渡った。（江の幅三〇〇メートルくらい）

ラーゲル（収容所）へ

ここは旧敵地ソ連邦シベリアである。色々な想いで、二段に仕切られた貨車に詰め込まれた。奉天を出発するときは持てるだけ持てと持たされた荷物も、ここでは最少限にして、もうじき「東京ダモイ」だから置いてゆけと言って、取り上げられてしまった。

汽車は暗くなってから動きだした。西か東か方角は分らない。三、四日目、突然「おお、海が、日本海

が見えるぞ」の声に窓の隙間よりのぞくと、なるほど海が見えた。「おお、やっぱり帰ってこれたか。東京ダモイは本当であった」と歓喜の声が沸いた。しかしそれも束の間、バイカル湖と分かり、今まで完全にだまされていたことが初めて分かった。

汽車に詰め込まれてから、もう一週間以上にはなるだろう。ようやく着いた駅は一面の銀世界。長旅で疲れているのに雪路を徒歩で二時間ほど行くと、前方の小高い丘に板壁に囲まれた黒い数棟の建物が見えてきた。ラーゲル（収容所）と直感した。カザフスタンのチェケリ、鉦山の町である。もう致し方がない。みんなと一緒だ。何とかなるさ、の想いで黒壁の門をくぐった。一収容所に一〇〇〇人余が収容された。

部屋は真ん中が通路で、両側三段に仕切られていて、入り口とその奥にベチカ（暖炉・ストーブ）が各一基ずつある。

身体検査（持ち物検査）をされ、毛布三枚、飯盒、歯磨き、手ぬぐい以外は全部没収された。米は靴下に入れて三本、片足に五合入っている一升五合、だが

それ以上だったと思う。ほとんどの者が持っておったから、相当の量になったはずだが、取り上げられてしまい、以後一度も米粒を見たことはなかった。朝、馬鈴薯のスープを飯盒の蓋に約一杯と一握りの黒パンだけ。「なんだ、これだけか。これで働けと言うのか」と思った。

レンガ工場での作業

十五人一組でレンガ工場の作業、窯の出し口付近に乱積みしてあるレンガを製品置場に運ぶその距離五十メートルくらい、道具はターチカ（木製で輪だけが鉄の一輪車）、地路では動かないので、板のレールを敷いて運ぶ。日本の一輪車とはわけが違う。その一輪車でも、パンクしたらどうしようもない。それが細い鉄の輪だけである。脱線転覆の連続で、ターチカの運転は本当に難しい。

最初の頃は、一生懸命やっても三〇％の成績、ただでさえ少ない食糧、パンがますます少なくなる。空腹と寒さは身にこたえる。「ビストラ・ビストラ（早く早く）」と監督は追い立てる。手袋ではレンガがよく

つかめないので素手でやる。息を吹きかけ、手をこすりながらやった。それも長続きしない。三〇〜四〇分もやると、手の皮がむけて血がにじんでくる。

作業は五時に終わるが、三時頃にはもうへとへと。

その頃になると監督が回ってくる。成績が悪いと怒鳴る。雪をかじってまた頑張る。作業の終わる五時頃には体力も限界に等しい。雪をかじりながら二キロの道程を、やっとの思いでねぐらに帰り着く。わずかばかりの食糧を流し込む。昼間の労働にはとても適した量ではないが、少しでも胃に収めなければ生きてゆけない。

そればかりか、もう一カ月余も入浴はしていない。体中蚤・シラミだらけ。体の動いているうちは静かにしているが、寝台で横になると、むずむずと活動を始める。まだいる、南京虫だ。小豆ぐらいの大きさで、平べったい、ちょうど亀虫のようである。この虫は、体には付かないが、寝台の板の隙間にびっしりと横になって待っている。寝付く頃に大勢やって来て、首筋や手足など出ているところを刺して、さっと板の間に

隠れてしまう。蚊よりひどい。

また、夜中にトイレに行くのが大変であった。別棟で、雨露しのぐ程度の細長い掘っ立て小屋で、仕切りも扉もない。ただ薄暗い小さな電灯が一つあるだけだ。温度は零下三〇度ぐらい。特に大便の方は、早くしないと尻が冷たくて体の芯まで冷えてしまう。早々に引き上げる。床に入っても体が冷えていてなかなか寝付かれない。また、蚤やシラミが攻めたてくる。ただでさえ生きるのが精一杯なのに、これでは栄養失調になって倒れるのが当然。ならないのが不思議ではないか。生き地獄そのものであった。昨日も、また今日も、哀れにも多くの友が死んでいった。他人様如きではない。明日は我が身である、と覚悟していた。

昼休みには、食堂の裏のゴミ捨て場で野菜クズや馬鈴薯の皮などをあさり、飯盒に詰めて持ち帰り、ペーチカで湯がいて二、三人で分け合って食べた。

便所の掃除当番

便所は、深い溝を掘り（約二メートル）、汚物が落ちる程度の丸い穴の開いた板が敷いてある。仕切りも

キンカクシも扉もない。一列に十五人ぐらい尻合わせで二列になっている。

冬は、便が逆さ氷柱になって凍って上がってくる。ときには、落とし穴より十五センチくらい突き出しているものもある。

掃除当番になると、溝の中へ入る。便の林は誠にすごいものだ。これを鉄棒で打ち割って倒すのである。飛沫が顔や口などへ飛んでくる。また、上着のしわなどに付いていて、よく払って部屋に入らないと、凍っている時は苦にならなかったが、溶けてくると臭いが出てきてたまらなかった。

道路工事

レンガ工場から道路施設工事に変わった。

土掘りは、一立方メートルがノルマ（基準量）である。厳寒時は二〇〜三〇センチも凍結していて、先の丸くなった鉄棒（ツルハシ）では、氷土は豆粒ほどの氷がピンと飛ぶだけで、受け付けてもくれない。歯を食いしばってやっと氷土が割れた頃にはエネルギーは燃えつきて、自動車なら完全にエンストである。

土の運搬はターチカ。運転は、レンガ工場で苦勞したので、ある程度の自信はあった。しかし、午前中の氷割りに時間がかかり、いくら頑張っても七〇%、これなら上等の方であった。一〇〇%上げなければ食糧は増えない。でも、これが限度。とにかくにも食うこと以外は頭になかった。最初の頃はまずくて捨てた黒パンが、だんだん美味しくなってきた。環境の恐ろしさを痛感した。

昨夜の診断でふらふらの者でも、熱が三十八度以上ない限り休むことができない。半病人もかなりいる。ノルマは、当然共同計算なので、%は推して知るべしである。ちなみに、食糧―(ノルマ+空腹+寒さ+蚤・シラミ・南京虫)―|| 栄養失調↓死亡

ソ連では、春秋はほとんどなく、冬から夏で、五月頃雪解けと同時に緑一色となり、また色とりどりのきれいな花が咲き乱れる。我々も待望の寒さから解放される。

食糧はあまり増えないが、アカザ・タンポポ・オオバコ・キノコ、それにバッタ・ネズミ・カエル・ヘビ

など、食えそうな物は何でも食って飢えをしのいだ。待ちに待った昼食も、三―五分で済んでしまう。日本食に例えたら、お吸い物に饅頭一個ぐらいの割だ。

昼休みは皆一斉に野草取りに出掛ける。帰って来て時間があると、シラミ取りである。お互いに取り合う。猿の毛づくろいの様子をテレビなどを見ると、当時の様子がありありと浮かんできく。

夏はありがたい。まず寒さからの解放が何より良い。それに野草のおひたしなどで補食ができ、ノルマも時には八〇%くらいまで上げることもあった。

鉦山(山)・入院

十月も半ばを過ぎると、もう冬である。雪の中をとぼとぼと帰って来ると、ラーゲル入り口に幌をかけた大型トラックが一台止まっている。「お前達はハラショーラボーター(優良労働者)だ。ダモイの先発だ。ダワイ、ダワイ(早くしろ、急げ)」と。今までだまされ続けてきたので、彼らの言うことは半信半疑。それでも他の作業隊員と三十人の混成でトラックに乗った。

自分はここ二、三日、体がつかない。今日は診断を受けるつもりであったが、着く早々にダワイダワイで車に乗せられ、それどころではなかった。

車中約一時間半、着いたところは何と山（鉾山）である。着くなり直ぐに仕事だ。もうマッセル（監督）が待っていた。直ちにカンテラの付いた安全帽、安全靴に身を固め、マッセルの案内で坑内に入った。

昨夜のうちに発破で崩したルダー（鉛の鉾石）をトロッコに積み、縦坑のエレベーターに積み込む。この鉾山は、鉛の含有量が六〇％以上で世界最高であるという。なるほど、非常に重くてピカピカしている。こんなのは、スコップですくっては重くてとてもトロッコに積むことができない。手で投げ込む。重いので、一杯積むのも大変なことである。

どこの作業場でも同じであるが、マッセルが、「ピストラ、ダワイ、ダワイ」と怒鳴りながら追い立てる。この頃の体調ではとても無理であった。

翌日、診断を受けにいったが、私の五、六人前の受診者で、病人のノルマはこれで打ち切り、残りは健康

人と見なされた。下痢もますますひどくなった。我慢に我慢して頑張ったが、三日目に遂に倒れこんでしまった。二十日は入院した。退院後はコルホーズへ移された。

コルホーズ集団農場・帰国

この農場では、退院者が多く、ノルマの強制もなく、食事もせいぜいパンの他に自分たちで収穫した馬鈴薯、リビョーチカ（トウモロコシの粉と小麦粉を混ぜてせんべい風に焼いたもの）などで、不自由はしなかった。

六月～九月、体調も快復し、昭和二十二年九月十五日、今度は本当のダモイの列車に乗ることが出来た。そして、二十二日間の長旅の末、十月三日、当日の日本海の見えるナホトカに到着、感無量であった。

ところが、帰国船の来るまでの間、護岸工事など色々の作業をさせられた。また、民主教育という関所が待ち構えていた。新青年連盟（民主教育者）に同調した形で、作業の行き帰りに必ず労働歌や赤旗の歌を歌わされ、教育された。

そして、十月十二日であったか、日の丸の旗を掲げた日本船が入港してきた。思わず万歳をし、目が潤んだ。

昭和二十二年十月十三日、遠州丸に乗船、ナホトカを出港し、十月十六日、舞鶴に無事上陸し、帰郷することが出来た。

抑留の地へ慰霊訪問

財団法人全国強制抑留者協会は、平成元年頃から毎年、慰霊訪問を行っている。

私は平成四年に参加して、最初の訪問地ウランウデへ行った。この地域には、沢山の日本人墓地がある。皆一枚分ぐらいに仕切られたそれぞれの所に番号が付されている。

一行の十二人で生い茂る夏草を取り除き、清掃して、中央に墓標を立てた。持参した酒や菓子などを供えて合掌した。団長が供養の言葉を述べるが、途中から嗚咽となり言葉にならず、一行も唯々涙々、案内のロシア人も貰い泣きしていた。また、奇しくもレンガ工場の犠牲者の墓もあり、遠く離れたカザフのレン

ガ工場の友を偲び、込み上げてくる涙をどうしても押さえることができなかった。

シベリア抑留記

岐阜県 水野 隆男

シベリアへ連行

開嶺南方若豆山の戦闘が終わったのは昭和二十年八月十六日。翌十七日は停戦と戦場整理。正午ごろ大隊は若豆山の戦死者に対して最敬礼の涙の決別をなし、陣地を後にし、ブハトにて武装解除、収容される。

私達は当然祖国へ帰還、復員できるものと考えていた。

ソ連軍人も、ダモーイ、ダモーイ（君たちは帰国できる）と盛んに言う。しかし、十月中旬、我々を乗せた貨物列車は新京方面へは向かわず、西に向かって動き出し、ハイラル、満洲里を経てシベリアに向かった。そして我々三大隊主力（一個中隊及び一部は別）